明治大学の教育

Education of Meiji University

文学部心理社会学科「哲学専攻」新設

2018年4月、明治大学文学部心理社会学科に、新たに「哲学専攻」が生まれた。人文学の軽視や実学優先がさまざまに取りざたされている昨今、「哲学」という古めかしい看板を掲げた私たちの新たな挑戦は、時代の表層に左右されない快挙なのか、はたまた時代のニーズに背を向けた暴挙なのか、期待と不安をもって迎えられているのかもしれない。しかし、私たちは、今の時代だからこそ、この古くて常に新しい学問領域の場が明治大学に必要であるという確信を持って歩みはじめたのである。

哲学専攻の目指すもの

グローバル化や情報化が急速に進み、さまざまな価値観がぶつかり合う現代社会において、私たちは実にさまざまな新しい社会問題に直面している。にもかかわらず一方で、現代に生きる私たちは、そうした問題を解決するために粘り強く考え続ける力や語り合う力を失いつつあるのではないだろうか。複雑多岐にわたる現代の諸問題を受け止めつつ、より良き社会をつくり上げていくためには、みずからの頭で論理的に粘り強く考え、価値観の異なる他者と対話を続ける姿勢が何よりも不可欠であろう。そうした思いから、新たに開設した私たちの哲学専攻では、単に過去の哲学を知識として習得するだけでなく、他者の言葉を受け止め理解する力、冷静に粘り強く考え抜く力、みずからの考えを明晰に表現できる力を養うことを目指している。これこそが、これからの時代を生きていくために最も必要とされる力であると信じているからである。

カリキュラムの特色

右記の目標を達成するために、新しい哲学専攻のカリキュラムは次の三つの特色を持つ。

(1) 現代の問題を考える

哲学といえば、昔の哲学者の哲学書を読むことがイメージされるかもしれないが、過去の哲学者の思索を学ぶことは、知識として過去を知ることにとどまるものではない。むしろそれは、現代に生きる自分の個人的な問題や自分をとりまく現代社会の問題を考える上で必要な考え方の道筋や整理の仕方を学び、みずからの考えに形を与えるために不可欠な作業なのである。哲学専攻では、常に身近な問題や現代的な諸課題を念頭に、過去の哲学者の思索を導き手にしながら学ぶことを目指している。

(2) 実践的に取り組む

新しい哲学専攻は、文学部の「心理社会学科」の中に設置された。このことは、私たちの哲学専攻が、「心理社会学科」に属する既存の「臨床心理学専攻」と「現代社会学専攻」の培ってきた実践性重視の教育を共有することを意味している。哲学を学ぶ上で文献講読は不可欠だが、それだけにとどまらず、対話形式やグループ作業を積極的に取り入れた多様な授業形態を通じて、学生たちの主体的な学習を促している。特に、哲学が現代社会に果たしうる実践の一つとして注目を集めている「哲学プラクティス」(後述)を科目として設置し、教室の中だけにとどまらない実践的活動を試みている。

(3) 多角的に学ぶ

従来、哲学といえば、西洋哲学を意味し、日本や中国をはじめとするアジア地域の哲学は付随的にしか扱われないことが一般的であった。しかし、グローバル化が進む現代において、西洋哲学だけではなく、アジアの哲学についても同じように学び、洋の東西にとらわれない新しい哲学の可能性を考えることが求められている。特に、日本において日本語で思索する私たちにとって、西洋の哲学を学ぶ上でも、さまざまな哲学概念を漢字の

合田 正人　文学部教授
(ユダヤ思想、フランス哲学)

志野 好伸　文学部教授
(比較思想、中国哲学)

池田 喬　文学部准教授
(現象学を中心とする現代哲学・倫理学)

坂本 邦暢　文学部専任講師
(ルネサンス期哲学、科学哲学)

PROFILE

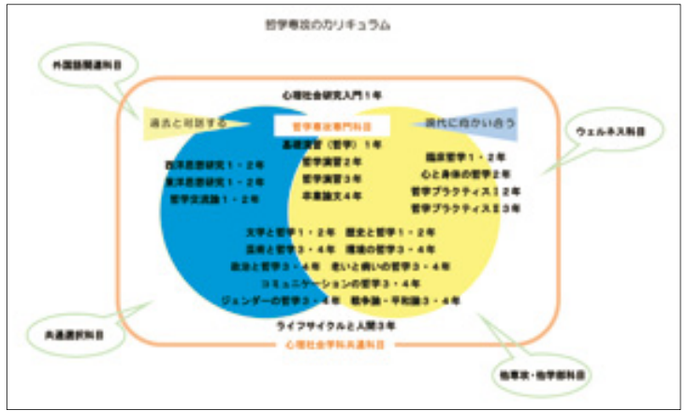
垣内 景子 Keiko Kakiuchi
文学部教授

専門分野: 東洋哲学、朱子学
1963年 鳥取県生まれ
1986年 早稲田大学第一文学部卒業
1993年 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学
1997年 明治大学文学部専任講師
2007年より現職

主な著書・論文: 『朱子学入門』(ミネルヴァ書房・2015)、『「心」と「理」をめぐる朱熹思想構造の研究』(汲古書院・2005)、『朱子語類訳注』(汲古書院)
所属学会: 日本中国学会、日本儒教学会、日本思想史学会、東方学会ほか

言葉に翻訳しつつ理解する以上、アジアの伝統哲学の知識は不可欠なものといっても過言ではない。私たちの哲学専攻は、西洋哲学を専門とする教員3名、東洋哲学を専門とする教員2名から構成されており、カリキュラムの中で西洋・東洋いずれについても学ぶことができると同時に、「哲学交流論」といった東西を横断する授業を設置し、学生たちが多角的な視点からさまざまな問いに取り組むことを促している。

哲学専攻カリキュラム概念図



哲学プラクティス

新しい哲学専攻の特徴を最もよく表わしている「哲学プラクティス」についてもう少し詳しく紹介したい。いま哲学の最前線においては、いわゆる「机上の空論」ではなく、みずからの経験に根ざし、対等な市民として互いに対話し、見過ごされている問題を発見し、新たな角度から見つめ直すことが注目されている。こうした哲学の新しい動きを教育や社会の現場で実践しているのが「哲学プラクティス」である。こうした哲学の新しい学び方は、世界的にも注目されており、日本でも学校現場や「哲学カフェ」などさまざまな場所で広がりつつある。私たちの哲学専攻では、この最前線の取り組みを科目として設置し、「哲学プラクティス」を実体験するだけでなく、その問題点や展望についても考え、将来より有意義な「哲学プラクティス」を担うことのできるリーダー的人材の育成を目指している。

なお、哲学プラクティスという活動そのものを研究対象とする「哲学プラクティス学会」の事務局（代表＝池田喬）は本専攻にあり、全国の大学で展開している同じような取り組みの中心的な役割を果たしている。

哲学カフェ・哲学プラクティス

発足を記念して

2018年4月14日、哲学専攻の発足記念シンポジウム「なぜ、今、哲学なのか：発言する哲学、越境する哲学」がリバティタワーで開催された。シンポジウムには、学外から第一線で活躍されている5名の方々をお呼びし、哲学専攻の5名とともに活発な議論が行われた。当日は200名を越える参加者を迎えることができ、盛会のうちに新しい哲学専攻の出発となった。

シンポジウムには第一期生の新入生諸君も出席したが、自分たちの門出がかくも祝福され期待されていることに何かを感じ取ってくれたのではないかと考えている。

発足記念シンポジウムの様子

また、専攻発足を記念して、私たち5名の教員で『いま、哲学が始まる。明大文学部からの挑戦』（明治大学出版会）を出版した。本書は、これから哲学を学ぶ若い人たちに向けて書かれたものであるが、私たち5名の意気込みを読み取っていただければ幸いである。

『いま、哲学が始まる。』

海外研究者との交流

最後に、私たちの専攻のもう一つの強みを紹介したい。哲学専攻の各教員は、以前から海外のさまざまな研究者たちとネットワークを持ち、さまざまな研究活動を展開している。

今年の例で言えば、9月には中国広州の中山大学と「東アジアにおけるフランス哲学」をめぐる合同シンポジウムが予定されているほか、10月から1カ月間、ストラスブール大学哲学科名誉教授のジェラール・ベンスーサン氏を招聘する。また、12月11日には、カリフォルニア大学バークレー校の修辞学比較文学教授ジュディス・バトラー氏の名誉博士号授与式と記念講演が予定されている。

今後も、海外の研究者との共同研究会やシンポジウムを積極的に企画し、できるだけ学生たちをも巻き込んで活動するつもりである。哲学専攻が文学部のグローバル化の実践の中心的な場だと言っても過言ではない、というのが私たちのひそかな自負なのである。こうした教員のフットワークの良さと海外との幅広いつながりは、学生諸君にも大きな刺激となるであろうし、世界の最前線の議論を自分たちの大学で目の当たりにできるという経験は、彼らにとって大きな財産になるものと期待している。

なお、哲学専攻独自のホームページ(http://www.kisc.meiji.ac.jp/~philo/)も開設した。より詳しい情報および最新の動きについてはそちらを随時ご覧いただきたい。